第17回 奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ開催のご案内

自己効力感で行動が変わる
～生涯を通じていきいきと過ごすヒント／子どもを上手にほめるヒント～（仮）

皆さんは自己効力感と言う言葉を知っていますでしょうか？これは「目の前のやることに対して、自分はできる！」と個人が思う確信のことを言います。つまり、その確信が強いほど、何事もやりたいと思えることが増え、いきいきとした生活を営み、主体的な行動が増えてきます。自信がつきます。子供であれば自分に自信が持てるようになります。それでは、自己効力感を高めるには、どうしたらよいのでしょうか？今回の登美ヶ丘カレッジでは簡単な工夫で生涯を通じていきいきと過ごすヒントをお伝えできればと思っています。

奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
福原 啓太 先生

開催予定

日時：2023年12月9日（土）13:00～14:30
場所：奈良学園大学1号館　4階1409教室
定員：定員：30名
（定員に達しましたら、募集を締め切らせていただきます）

こちらから
申込みください。

第17回登美ヶ丘カレッジ
申込フォーム

※ソーシャルディスタンス・換気・消毒の徹底等、感染防止対策を行います。
※教員だけでなく学生も参加します。

ニューズレター第11号　編集後記ご挨拶

3年ぶりに再開の特別聴講生（海外留学生）の受入で、人間教育学科のゼミ生と共にフィールドワークに参加された11号の寄稿は記念すべきものとなりました。

また、登美ヶ丘カレッジにご参加頂いている皆様から、今後のお知らせのご要望を頂き大変有り難く思います。本誌の発行日と前後しますが、以下は後期開催日程一覧です。

【第16回 看護学科】　日時：10月21日（土）午後
テーマ「災害時の心のケア － 誰もが支援者になれるように－」：担当講師 堀内美由紀

【第17回 リハビリテーション学科】　日時：12月9日（土）午後
テーマ「自己効力感で行動が変わる～生涯を通じていきいきと過ごすヒント／子供を上手にほめるヒント～（仮）：担当講師 福原啓太（作業療法学専攻）

【第18回 人間教育学科】　日時：3月2日（土）午後
テーマ「音楽の楽しみ」：担当講師 森瀬智子、青山雅哉（音楽専修）

本学講師と学生達により、懐かしい曲集を含め様々な音楽をお楽しみいただければと思います。お誘い合わせの上、是非ご参集頂けますよう心からお待ちしております。

奈良学園大学
社会・国際連携センター長
善野 八千子

発行　奈良学園大学
社会・国際連携センター
〒631-8524 奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1
TEL：0742-93-5405　FAX：0742-95-9850

奈良学園大学
NARAGAKUEN UNIVERSITY

ニューズレター

Vol.11
Newsletter
2023年10月発行

各種公開講座が開催されました。

教職員のための公開講座

8月8日（火）「これからの教育現場に求められる算数・数学を使った探究的な学び」
担当：人間教育学部人間教育学科　葛城元講師

小学校・中学校・高等学校の教員の皆様にご参加いただき、「研究的な学びの要点」についての解説がありました。講義の前半には、数学的モデルを応用する算数・数学での取り組み、研究的な学習の先行例を探す方法等の紹介がありました。講義の後半では演習として、「ミウラ折り」を活用した缶模型を、紙を使って作成しました。アンケート結果の満足度では「強くそう思う」が100%、「2学期に活かしたいと思う」、「来年も楽しい講座期待しています」等、多くの感想もいただきました。

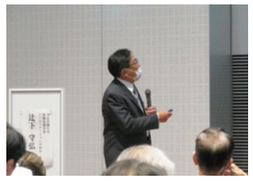
第15回登美ヶ丘カレッジ

9月2日（土）「小学校入学に向けて体験しよう」
担当：人間教育学部人間教育学科　高岡昌子教授、石原由貴子講師

義務教育開始前後にあたる5歳児から小学校1年生の2年間は“架け橋期”と呼ばれ、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくる重要な時期と言われます。その架け橋期前半の小学校入学前に付けておきたい力について、心理学の視点を交え、実際の保育現場での事例等が紹介されました。架け橋期の子どもをもつ保護者及び現場に携わる教育者・保育者の参加となりました。

けいはんな学研都市7大学連携市民公開講座開催

9月8日（金）「身体の声を聴く健康法
～バイオフィードバックの新しい可能性」
担当：保健医療学部リハビリテーション学科　辻下守弘教授



バイオフィードバックとは、バイオ（生体）の情報（身体の声）をフィードバック（聴いて自己調整）する健康法として医療や心理療法で広く使われています。本講座では、心拍や呼吸を使ったバイオフィードバックの新しい可能性についての紹介がありました。

本講座では、117名が参加し、講演後の質疑応答でも、多くの質問があり、バイオフィードバックへの関心の高さを感じる講演となりました。

ニューズレター Vol.11 によせて

大和郡山市教育長
谷垣 康

大和郡山市の教育大綱には、『郷育』と『響育』という言葉を掲げています。『郷育』は「ふるさとで育ち ふるさとに学び ふるさとを創る」、『響育』は「心に響く みんなで響くずっと響く」を基本理念としています。

『郷育』の取組としては、各小学校区（11校）にある無名橋（名前の付いていない橋）に小学生が相談して命名する「無名橋名付け親プロジェクト」を実施しました。現在、市内には小学生が名前を考えた57の橋に橋名板が取り付けられ、二次元コードからその由来などが見られるようになっています。中学生は、各校区（5校）の観光名所を英語で紹介する「英語で発信！大和郡山市観光スポット」の動画を作成、YouTubeにあげています。

『響育』では、「響け！大和郡山」というミュージックビデオを制作、これもYouTubeにあげています。幼児から高齢の方々まで、世代を超えて、大和郡山市の美しい風景とともに、歌でつながるミュージックビデオです。これは、学校教育と生涯学習のコラボレーションです。是非、右の二次元コードからご覧ください。

「シビックプライド」　大和郡山市では、今後も自分の生まれ育った地域を大切にし、誇りをもった子どもたちを育てていきたいと考えています。

地域の皆様へのご挨拶

奈良学園大学
大学院リハビリテーション学
研究科長
西川 隆

古都奈良の癒しの歴史を先進的リハビリテーション科学に繋げる

奈良学園大学は令和5年度にリハビリテーション学研究科修士課程を開設しました。現在わが国では超高齢社会を迎え、高齢者や障がい者が住み慣れた街で快適に生きることを支えるために、各地域で医療・保健・福祉の専門分野が有機的に連携した「地域包括ケアシステム」の構築を進めています。それを受けて本研究科では「臨床実践リハビリテーション学」と「生活支援リハビリテーション学」の2つの分野を設け、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士が、医療現場と生活地域で専門職間連携の中軸を担うことができるよう、科学的根拠に基づく臨床実践力、地域での連携調整能力、そして、臨床と地域生活の広い視野に立って問題を解決する能力を養成することを目指しています。

本学は国会図書館関西館や多くの大学・研究機関が集合する「けいはんな学研都市」に立地し、すでに他の研究機関や地域団体との共同研究も始めています。そして何より、古都奈良の地には、天平時代の施薬院・悲田院や鎌倉時代の北山十八間戸にみられるような「癒しのこころ」が歴史に刻まれています。現代の高齢化社会という課題に先端的医療科学で応えるという新たな歴史を創るために皆様の御力添えをお願いいたします。

奈良学園大学の教員紹介

奈良学園大学 人間教育学部 人間教育学科　**太田 雄久 先生**

私は理科教育を研究しています。これまで、公立、国立の小学校に勤務し、理科を中心として授業実践を積み重ねてきました。また、その時から現在まで、小学校の授業研究や教員研修の講師等の経験も積み重ねています。特に、小学校現場で先生方とともに現行の学習指導要領で求められる授業の在り方を考えることは、学部での学生指導の充実にも繋がっています。今後は、授業実践力を兼ね備えた多くの「教師」を育てるとともに、理科を核とした教科横断的な指導についての研究も深めていきたいと考えています。

奈良学園大学 保健医療学部 看護学科　**牧野 裕子 先生**

私の担当領域は「地域・在宅看護学」で、保健師を目指す学生の講義・実習と、訪問看護をはじめ地域で看護活動を展開するために必要な科目を担当させて頂いています。

研究活動では、認知症の両親の介護体験から認知症の予防と併せ、認知症になっても安心して暮らせる社会をめざし、小型のコミュニケーションロボットを用い、独り暮らしの認知症の方と離れて暮らすご家族の双方が安心して日常生活を送ることが出来るための支援について、取り組んでいます。

奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科　**中田 修 先生**

私の専門分野は高次脳機能障害に対する作業療法です。高次脳機能障害とは、脳血管障害や頭部外傷、低酸素脳症や感染症などが原因で脳に損傷を負った結果、認知機能や行動に異常をきたす症候です。身体機能に障害がみられないことも多く、家族も含めて在宅生活に問題を抱えており、そのような方々の生活支援の方略を探求しています。また認知機能の衰えた高齢者の在宅生活や、高機能自閉の子どもの支援についても研究しています。

卒業生からのメッセージ

奈良学園大学
保健医療学部
看護学科
6期生
竹内 美帆 さん

私は奈良学園大学で看護師および保健師免許を取得し、今春から、循環器の専門病院で手術室看護師として勤務しています。

大学在学中は、新型コロナ感染症流行で制約もありましたが、やはり実習は、アセスメントや看護展開の方法を再確認する貴重な経験で、現在の看護実践の基盤になっています。手術室の特徴から大学で学んだことの全てがそのまま活きる部署ではありませんが、術中は、患者さんの意識がないのでモニターや細かな輸液管理、術中体位固定の際の神経損傷や褥瘡予防といった高い専門性を求められ、だからこそ、アセスメントは重要です。症例に入る前にはアセスメントを含む看護計画の内容を先輩看護師から指導を受けますが、褒められることも多く大学での学びが活きていると思います。

看護師として新生活をスタートしたばかりですが、お世話になった先生方からたまに頂く連絡が励みになっています。改めて大学４年間での出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。

在学生からのメッセージ

奈良学園大学
保健医療学部
リハビリテーション学科
3回生
小林 ゆるり さん

私の目標は患者さんから信頼される理学療法士になることです。

高校時代に部活でケガをした事がきっかけで理学療法士という仕事を知りました。リハビリをする中で、相談にものってもらい安心して部活を続ける事ができました。

理学療法士の勉強は思っていた以上に難しくつまずく事もありますが、先生に質問したり友達に教えてもらったりしながら今も勉強に励んでいます。

地域を素材にした学習を考える　～兵庫県神戸市を訪ねて～

今回実施した社会科教育ゼミの現地調査では、「防災教育」に焦点をあて、特別聴講生の姜さん、康さんを招いて、兵庫県神戸市にある「人と防災未来センター」「神戸港震災メモリアルパーク」に行きました。

人と防災未来センターは、1995年の阪神淡路大震災で亡くなった命を追悼する博物館です。博物館の展示や動画を見る中で、自然災害に直面した時の人間の無力さを感じ、涙を禁じ得ませんでした。しかし、見学し続けるにつれて、震災の中、人々は支え合い、つながりあって生きてきたことがわかりました。この博物館は、失われた命を追悼するだけでなく、自然の中で生きていくことの意味を考えさせてくれます。(姜鑫燦)

神戸港震災メモリアルパークは、阪神淡路大震災後の神戸港復興の様子を記録した公園です。きれいな神戸港の一隅に、約60メートルの被災した神戸港の波止場が当時のまま残されています。被災した波止場と、復興した神戸のまちの様子を同時に見ることができ、復興への人々の努力を感じ、心を打たれました。天災は無情なこと。しかし、人間には情がある。どんな災難にあっても、人々の心がつながれば、必ず山を越えられると私は思います。(康窈嘉)

今後も、現地に足を運ぶからこそ学べることを大切にし、学びを深めていきます。

文：姜鑫燦、康窈嘉（特別聴講生）、吉田彩花（人間教育学部3年生）　文責：澁谷友和